

中学1年 道徳

柏市立中原中学校 磯崎 宏樹

1. 探究的な学びの単元づくり

(1) この単元のねらいや身に付けたい力（情報活用能力の視点から）

まず、第1回（7月）の情報活用能力に関するアンケートにおいて、「できる」と回答した生徒が少なかった項目のうち、以下の3項目に注目した。

- ⑥ 資料を読み取る際に、重要なポイントを意識し、必要な情報とそうでない情報を区別することができる。(22%)
- ⑧ 実際の生活の中から課題を見つけ、解決に向けて取り組むことができる。(22%)
- ⑨ 課題解決のために必要な情報を考え、集めることができる。(28%)

これらはいずれも情報活用能力の基礎であり、さまざまな情報が飛び交う現代社会において、誤った情報や偏った考えに流されないために必要な力を問う項目である。そこで今回は、道徳の授業で実践・研究を行い、情報活用能力育成のプロセスにおける「情報の収集」「整理・分析」の部分に特化し、課題解決に向けた情報を収集できる力、得た情報を取捨選択ができる力を生徒に身に付けさせたい。

(2) 学習計画（全6時間）

学習のゴール：端末の利用を通して意見の発信を行うと同時に、他者の意見に触れる機会を増やすことで、より広く深い考え方ができるようになる。

	時	・学習内容 ○身に付けたい力
情報の収集 整理 分析	1・2	<ul style="list-style-type: none">① <u>「嘉納治五郎先生との出会い」(B 人とのかかわり)</u>② <u>「希望の風に」(C 集団や社会とのかかわり)</u><ul style="list-style-type: none">・感じたことや気づいたことはプリントに記入する。・意見の共有は、発表または話し合い活動を実施する。 <p>○他者の意見を聞き、改めて自分の考えを見つめ直すことができる。</p>
	3～6	<ul style="list-style-type: none">③ <u>「オレは最強だ！」(A 自分自身と向き合う)</u>④ <u>「誰かのために」(D 自然や崇高なものとのかかわり)</u>⑤ <u>「自分の心の中の自分」(C 集団や社会とのかかわり)</u>⑥ <u>「パーソナリティー」(A 自分自身と向き合う)</u><ul style="list-style-type: none">・プリントの配付は行わず、意見の発信、共有をコラボノートで行う。・意見の共有は、コラボノート上に意見を発信するシートを準備する。 <p>○コラボノートを使用して意見を発信し、他の生徒と共有できる。</p> <p>○考え方や表現について、自分と違う意見を見つけることができる。</p> <p>○他者の意見を見て、改めて自分の考えを見つめ直すことができる。</p>

2 実践の流れ

○段階1（1～2時間目）【プリント配付形式】

プリントを配付し、生徒が感じたことなどを記入する形式で道徳の授業を展開した。授業では、「挙手・指名による発表」や「近くの生徒との意見交換」の場面を設け、意見の共有を促した。意見を記入する時間を確保したところ、自分の考えをスムーズに記入できた生徒は全体の約7割であった。一方で、3割の生徒（約8人）は、一言だけ書いたり、空欄のまま待っていたりする様子が見られた。特に、空欄のままの生徒の中には、数学の授業では頻繁に発表するなど、学習に前向きな生徒も含まれており、「正解の記述は何か」を考えているように感じられた。次に、挙手による意見の発表を求めるとき、どのクラスでも4～5人が挙手をしたが、1人が発表すると「同じ意見だから」という理由で挙手をやめる傾向があった。話し合いの場面では、班ごとに議論の活発さに差が見られた。意見が異なるメンバーがいる班では議論が活発に行われたが、同じような考え方を持つメンバーが集まつた班では議論が進展せず、単なる意見の共有にとどまり、時間が余る様子もあった。また、他者の意見を聞いた際にメモを取る生徒は、どのクラスでも数名に限られていた。そのため、話し合いの材料は各自が持っている意見のみとなり、議論というよりは「意見を伝え合う活動」にとどまっている印象を受けた。

【段階1での課題】

- ・メモを取る習慣がないため、意見や考えを振り返ることが難しい。
- ・積極的な生徒の発言が目立ち、多面的な視点を得にくい。
- ・自分の考えが全体の多数派か少数派かを把握しづらい。
- ・生徒の意見が独立しており、授業全体で発展させることが難しい。

○段階2（3～6時間目）【クラウドツール利用形式】

クラウドツール「コラボノート」を使用し、生徒が自分の意見を入力する形式の授業を展開した。他者の意見と共有する前に自分の考えを発信できるよう、【個別学習モード】を活用した。その結果、プリント学習の際よりも意見を発信する生徒が増え、約9割の生徒が考えを入力できた。1割の生徒についても、「A寄りの考えなら黄色の付箋、B寄りの考えならピンクの付箋」といった形で色に意味を持たせることで、明確な意思表示をしながら次の段階へ進むことができた。



【個別学習モード】

他人の更新が反映されない。

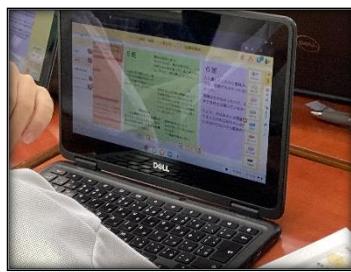


【協働学習モード】

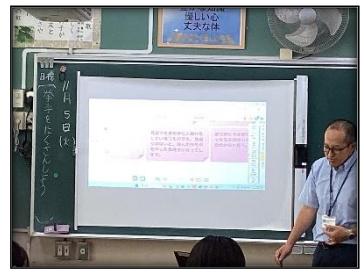
全員の更新が常に反映される。

指導者が画面上で進捗を確認し、一斉に更新すると、生徒の視線は画面に集まり、順番に他者の意見を閲覧する様子が見られた。これにより、全員の意見が共有され、従来のプリント形式と比べて視覚的に得られる情報量が大幅に増加した。また、従来の発表形式では積極的な生徒の意見が目立っていたが、この方法では全員が自分の考えを明確に

示せるため、自身が集団の中で多数派なのか少数派なのかをはっきりと把握できる。実際に、意見の割合に対し、生徒たちははっきりと反応を示していた。また、話し合いでの意見共有の際には、全員が同時に入力できるスペースを準備し、効率的に議論を進められるようにした。進め方に関する教師からの指示は最低限にとどめ、生徒に委ねる形をとったところ、共有スペースの使い方や、話し合いは先にするか後にするかなど、各班で活動の進め方が異なる様子が見られた。



意見の入力や話し合いをしている際には、端末に目を向けて他者の考え方を閲覧する姿が見られた。これは、従来のプリント配付形式の授業では見られなかった動きだが、他者の意見が常に見える状態にあることは、考えの幅や視点を広げることに役立ったと考えられる。発表については、プリント配付形式では難しいさまざまな方法をとることができた。生徒が入力した意見をスクリーンに映し出し、全体で共有する際には、記入者を特定せずに取り上げることができた。また、班の意見は従来、ホワイトボードや黒板に直接書く方法が主流だったが、見づらさに課題があった。しかし、今回の形式では、画面上で意見を見ながら発表者の話を聞くことができ、見やすさの改善と生徒の動きの簡略化という大きな利点が感じられた。



【段階2での成果と課題】

《成果》	《課題》
<ul style="list-style-type: none"> ・意見の発信がしやすい ・つねに考え方を共有できる ・匿名で授業者が意見を取り上げられる ・生徒中心の授業がしやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの時間を設定しづらい ・授業準備の時間がかかる

3 実践を終えて

道徳の授業での実践では、従来のプリント配付形式に比べ、意見の「発信」「共有」「分析」がしやすくなった。また、生徒の意見を中心に進めることで、「生徒主体の授業」を展開することができた。その結果、考えを深める場面では、生徒自身がページを切り替えて授業の前半の考えを振り返ったり、他者の意見から新しい視点を見出そうとしたりする姿が見られた。

具体的には、端末を用いることで、生徒は即座に意見を入力し、それをクラス全体で可視化できるようになった。例えば、ある授業では「命とは何か」というテーマで、生徒の意見を集約し、それぞれの考えの共通点や相違点を確認しながら議論を進めた。このプロセスを通じて、生徒は他者の考えを尊重しながら、自分の意見をより深く掘り下げることができた。また、意見の記録が残るため、後の振り返りにも活用することができた。

このことから、端末を適切に活用することで、生徒の主体性が高まり、自ら新しい情報を求めたり、発信したりするサイクルが生まれることがわかった。このような学習環境を整えることで、生徒の情報活用能力の育成にもつながると考える。

また、第2回のアンケート結果からも、端末利用・情報活用に対して自信をつけた生徒が多いことがわかった。

⑥資料を読み取る際に、重要なポイントを意識し、必要な情報とそうでない情報を区別することができる。
(22%→36%)

⑧実際の生活の中から課題を見つけ、解決に向けて取り組むことができる。
(22%→35%)

⑨課題解決のために必要な情報を考え、集めることができる。
(28%→53%)

中原中学校では、私の実践に加えて、端末の活用が積極的に行われてきた。例えば、スライドを使った全校プレゼン発表会や、各教科の授業での端末を活用した学習や発表が行われた。このアンケートの変容は、1年間の様々な活動や授業の中で「端末利用の機会」を増やし、積極的に場面を設定してきた成果が表れているといえる。

一方で、課題も見えてきた。意見を入力する際に、一部の生徒はタイピングに時間がかかり、思考の流れを妨げる場面があった。また、発言が活発な生徒とそうでない生徒の間に発信回数の差が生じることもあった。これらの課題に対しては、授業や活動での横断的な使用や、グループでの意見共有を増やすことで対応できると考える。

今後は、この実践で得られた成果をさらに発展させるとともに、他の教科での活用の可能性も探っていきたい。特に、国語や社会の授業では、論述力の向上やディスカッションの活性化に役立つと考えられる。端末を活用した学習の質を高め、生徒が主体的に学び続ける環境を整していくことが、今後の課題である。

